

月並みですが「継続は力なり」、そして「新宿高校の縁」を大切に

三矢恵子（新 26 回生） NHK 放送文化研究所メディア研究部 研究主幹

私は、1980年にNHKに入局し、最初に世論調査所（現、放送文化研究所）に配属されて以来35年余り、世論調査を中心はずっと調査の企画・分析・報告の仕事に関わり、40代からは管理職として、調査・研究のマネジメントや後輩の育成も担ってきました。そして2年前の10月に60歳となり、定年退職を迎えました。退職後の今も、契約職員として、同じ研究所で「NHK年鑑」という本の編集の仕事をしています。

この35年を振り返って特によかったと思うのは、1960年から5年ごとにNHKが実施している他には類のない「生活時間調査」という調査の担当者として、編成や番組制作の基礎となるデータの提供を通して間接的にでも放送や番組を支えられたことと、時間という切り口から見た日本人の生活の実態や変化についての分析結果を、書籍や研究誌に残せたことです。細かいことに目を向ければ、良いことばかりだった訳ではありませんが、全体を通してみれば、上司・同僚・部下など多くの人に助けをもらいながら、やりがいのある仕事をやらせてもらえ、成果を形に残すことができ…と、良い思い出の方が多い幸せな仕事人生だったと思います。35年続けたからこそ、こういう気持ちにもなれたと思います。また、NHKには新宿高校の卒業生が多く、いろいろな場面で先輩や後輩にお世話になりました。

では、高校生の時から、自分がこういう形で職業人生を送ることを想像していたかという、そうではありません。高校生だった1970年ごろは、まだ、女性は結婚したら家庭に入るのが当たり前という時代でしたし、一生働き続けるという明確なイメージは持っていませんでした。ただ、大学進学の際に、何か専門性の強い学部、学科で勉強をしたいという思いは強く持っていました。単純なきっかけですが、たまたま見た聴覚障害の人が主人公のドラマを見て聴覚障害児の教育に興味を持ち、そういう学科のある東京学芸大学に進学。4年間、専門的な勉強をみっちりしましたが、就職する決心がつかず、猶予期間のような形で大学院に進学しました。ここでさら

に勉強を重ね、先輩と話したり学問以外のいろいろな書物に触れたりするうちに、一生仕事を続けていこうという気持ちが固まってきました。

そして大学には残らず就職しようと決めましたが、当時、大学院出の女性が試験を受けられるのは、ほぼ教職、公務員、マスコミに限られていました。教職と公務員は受からず、最難関と思われたNHKのみなぜか合格。ただし、最初に思い描いていた「番組制作」の仕事ではなく管理系の職種で入局し、図らずも、それまで全く知らなかった世論調査の仕事をする事になり、一から勉強を始めて今日に至っています。

このように、私の仕事人生は、高校や大学の時点で確かな目標やそれを実現するための計画を持ち、それに沿って進んできたものというわけではありません。特に学生時代は、迷い、その度に真剣に考えて、何度か方向転換しつつ選んできた道のりと言えるでしょう。また、社会人になれば当然、やりたい仕事だけをできるわけではありませんが、担当した仕事については、常にその意味を問い、課題と面白さを見つけながら少しでもそれをよくしようと取り組んできました。また、ひらめき型ではなくコツコツ型の私は、とにかくどんな時でも…辛い時でも落ち込んでいる時でも、むしろそんな時こそ…目の前のことを一つ一つ終えていくことを心がけました。その積み重ねが35年という年月になったと思います。

私の経験から最後に一言。新宿高校出身というだけで、会話の糸口ができ、普通だったら親しくしていただけないような偉い方ともお付き合いすることができるなど、私がそうであったように、きっと皆さんも、これから先の人生の至るところで、新宿高校の縁を感じると思います。こうした伝統校の強みも生かして、どうぞ心豊かな人生を送ってください。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）